

ミツワ石鹸 人形アニメーションCMの放送年に関する 調査報告

細川 晋

アニメーション学科

Report on the Year of Broadcast of Mitsuwa Soap Corporation Puppet Animation Commercial.

HOSOKAWA Shin

Department of Animation

(Received October 31, 2024 ; Accepted December 5, 2024)

キーワード: 人形アニメーション、コマーシャル

Abstract

I pursued the contradiction between the history of puppet animation and the history of commercials by examining the year when Mitsuwa Soap's commercials began airing.

According to the CM history, a Mitsuwa Soap commercial featuring a puppet animation of three girls was broadcast in 1954.

However, a discrepancy arises because Shiba Productions, which produced that commercial, was established in 1958. Additionally, we were unable to find any text or images from books from the 1950s describing about the puppet animation of three girls.

As a result of various verifications, it is more likely that the commercial song was broadcast on radio and TV from 1954, but the puppet animation using puppets of the three girls did not appear until after 1954. 1954 was only the second year of television broadcasting in Japan. I conclude that the history of commercials and the history of puppet animation have been studied separately, and that the historical discrepancy may have been overlooked.

1.はじめに

“ワ、ワ、ワ、ワが三つ ワ、ワ、ワ、ワが三つ ミツワ、ミツワ、ミツワ石鹸”

これは三木鶏郎が作詞作曲したミツワ石鹸のコマーシャルソングの歌詞である。そしてこの曲が流れたミツワ石鹸のテレビコマーシャルは人形アニメーションを用いて制作され、ミツワ石鹸を製造販売したミツワ石鹸株式会社（旧社名：丸見屋）が廃業した現在でも、放送当時を知る人々の心に強く刻まれている。

ただし、そこで一つ問題が生じる。テレビコマーシャルの歴史では、人形アニメーションを用いたテレビコマーシャルの登場も楽曲の発表された年と同じ1954年とされているのだが、人形アニメーションの歴史で考えると辻褄が合わない。本調査ではその理由について記すとともに、なぜそのようなことが起きてい

るのかについて考察した。

2.三木鶏郎とコマーシャルソング

1951年にラジオの民間放送が始まり、ラジオコマーシャルが誕生した。そして2年後の1953年2月1日にNHKがテレビ放送を開始。さらに同年8月28日には日本テレビが初の民間テレビ放送を開始。それによりテレビコマーシャルが誕生した。現存する最も古いテレビコマーシャルが精工舎の時報のアニメーションであることは広く知られている。

この民間放送におけるラジオとテレビのコマーシャル黎明期において、数多のコマーシャルソングを手がけた一人が三木鶏郎だ。三木鶏郎（本名:繁田裕司 [しばたひろし] 1914～1994）は1946年、NHKラジオ『歌の新聞』に出演。音楽に時事コトを挟むスタイルで話題となった。翌年放送された『日曜娯楽版』の

中の『冗談音楽』では音楽、脚本、構成、演出を担当。戦後すぐの混乱期の中で政治風刺は大衆の心を強く掴み、人気を博していく。その一方で強い風刺の姿勢が国会で問題視され、失踪騒動を起こすなどした。仕事復帰後は風刺の色合いが薄まり、1951年に小西六写真工業株式会社（現在のコニカミノルタ）のラジオコマーシャルソング『ボクはアマチュアカメラマン』（作詞作曲：三木鶏郎／歌：灰田勝彦）を制作した。その曲が三木の手掛けた初めてのコマーシャルソングだが、三木は小西六の担当者が「商品名を入れない宣伝歌を作りたいという大胆な申込に応じてくれたのである。」と、この曲について記している⁽¹⁾。その言葉の通り『ボクはアマチュアカメラマン』の歌詞の中に企業名や具体的な商品名は入っていない。それなのにコマーシャルソングとして成立していたのは、小西六がスポンサーをしていたラジオ音楽番組『冗談ウエスタン』で放送されたためである。そして、当時は企業がラジオのスポンサーをすることだけでも企業の広告活動として成立していたからでもある。商品名のない『ボクはアマチュアカメラマン』は、一般のレコード会社が楽曲販売の申し出をしてきたことから分かるように、コマーシャルソングというより通常の楽曲とも言えるが、この制作を皮切りに三木は1950年代から60年代にかけて数多くのラジオやテレビのコマーシャルソングを制作していく。

三木をはじめサトウハチローやいずみたくなどが作詞や作曲をした、リズムカルな曲を用いたコマーシャルはシンギング・コマーシャルと呼ばれた。特に三木の楽曲の特徴は短い曲に同じフレーズを何度も繰り返し入れることで企業名や商品名を強く印象付けるものだった。その中の一つにミツワ石鹼のコマーシャルソング、通称『ワが三つ』がある。NHK放送博物館で開催された『トリローワールドへようこそ ～奇才が伝えた戦後のラジオ～』（2022年7月16日～10月16日）で掲示されていたCMソング年表によれば、三木がこの曲を作詞作曲したのは1954年だという。

三木にとって「シンプルな数秒のフレーズ」という注文に対して制作したこの27文字の曲は「あんまり短いので、正規の作詞料をいただくのがウシロメたかった」ものだったらしい⁽²⁾。しかしながら放送開始から70年間（2024年現在）が過ぎ、ミツワ石鹼を製造販売

していた丸見屋が廃業した今でもなお人々の印象に残り、コマーシャル史およびコマーシャルソングの歴史に燦然と輝いている。

3.ミツワ石鹼 三人娘とは

ところでこのコマーシャルソングの紹介や、それに言及している書籍には、テレビコマーシャルの画像が添えられていることが多い。そこには人形で作られた3人の女性キャラクターがブラスバンドの格好でバトンを持っていたり、3つの輪を持っていたりして写っている。そのキャラクターデザインは土方重巳（1915～1986）が行い、人形造形を川本喜八郎（1925～2010）が担当している。川本によると3人はミーとツーとワーという名前だという⁽³⁾。ただしメディアで紹介される場合はバトンガールや三人娘と呼ばれている（以降は三人娘と称す）。この三人娘が人形アニメーションの技術により躍動感あふれる動きを見せるテレビコマーシャルは、1950年代を代表するテレビコマーシャルの一つであり、楽曲の誕生と同じ1954年からテレビ放送されたと記されてきた。そのような内容を記した書籍の一部を挙げる。

（1）29'54「ワ・ワ・ワ ワが三つ」人形CM

（宣伝会議「ブレーン創刊15周年特大号 テレビCM総合年表」,1976年7月折り込み）

（2）「ミツワ石鹼のバトンガールも息が長かった。デビュー当初から洗練された技法で知られ、「ワ、ワ、ワ、ワが三つ」の歌は時流を追って幾度か編曲し直されたが、それに合わせて三人の女の子がリングを手に踊るという基本の型は変わらず、長くひとびとに親しまれた。」（向井敏「紋章だけの王国」,1977年P.49）

（3）「人形アニメーションCMの金字塔というべきはミツワ石鹼（当時丸見屋）のバトンガール。初出一九五四年。三木鶏郎作詞作曲の「ワ、ワ、ワ、ワが三つ」の歌に合わせて、三人の女の子がミツワの商標であるリングを手に踊るのだが～」

（全日本CM協議会編「CM25年史」,1978年P.154）

（4）「初期の手さぐり期の五年間には人形アニメ（ストップモーション）もはやった。昭和二十九年のミツワ石鹼のバトンガールの人形アニメーションアニメCMは今でも覚えている。」

(西村五洲「ハ虫類になった日本人：CM三十年の歴史が語る現代人の脳と行動のメカニズム」,1983 P.22)

(5) 「アंकルよりも五年早く、一九五三年八月二十八日に、日本におけるテレビ・コマーシャルの歴史は始まっている。が、それまではナマCMが中心で、フィルム・コマーシャルは手さぐり状態にあった。ミツワ石けんの人形を使ったアニメーションなど、少数の成功例があったにすぎない。」

(「CM文化論：ヒットコマーシャルの25年」,1980年 P.114) *アंकルとはアंकルトリスのことで、1958年にテレビ・コマーシャルが放送された。

(6) 「わ、わ、わ、輪が三つ」(丸見屋1954年)としてテレビコマーシャルのステルを使用(林進(ほか)「消費社会の広告と音楽：イメージ思考の感性文化」,1984年 P.26)

(7) 「ワ・ワ・ワ 輪が三つ ミツワ ミツワ ミツワ石鹸(ミツワ石鹸の人形CM、二九年)」(横田澄司、亀井昭宏「マーケティングの最前線」,1984年 P.207)

(8) 「「ワッワッワッ輪が三つ.....」のCMソングにあわせて足の長いバトンガール三人が踊るミツワ石鹸のTVCM(昭和二十九年)。ミツワ石鹸は、幼児の人気番組「名犬ラッシー」を提供していたため、番組自体の人気と相まって、人気CMとなった。」

(電通「月間アドバタイジング」,1990年3月 P.32)

(9) 「ミツワ石鹸 54」としてテレビコマーシャルのステルを使用(電通「月間アドバタイジング」,1998年 P.11)

(10) 「三人娘 1954(ミツワ石鹸)」としてテレビコマーシャルのステルを使用(「広告批評」,1999年 折り込み)

加えて「虹をつくる男たち：コマーシャルの30年」(向井敏,1983年 P.7)に記されているミツワ石鹸の人形アニメーションに関する文章は『CM25年史』と同じものである。

このように人形アニメーションのコマーシャルが1954年から放送されたという記載は数多くある。しかし三人娘の登場するコマーシャルを制作したコマーシャル制作会社シバ・プロダクション(以降はシバ・プロ)の設立は1958年である。

それでは1954年にこのコマーシャルの制作は出来ないという問題に直面する。

4.戦後日本の人形アニメーションと人形芸術プロダクション

まず、戦後日本の人形アニメーションの歴史について記す。その始まりは1953年の持永只仁の帰国である。持永はもともと手描きアニメーションを専門として『アリチャン』(1941年)『フクチャンの潜水艦』

(1944年)などに参加していたのだが、太平洋戦争の戦況悪化により日本国内が空襲に見舞われるようになると、1945年7月に海を渡り満州映画協会(満映)に入社した。ところがその直後に終戦を迎え、今度は中国の内戦に巻き込まれてしまう。1946年、持永は満映にいた木村莊十二や内田叶夢らと共に、中国共産党軍の指示のもと東北部に避難をして東北電影製片廠の設立に参加した。持永はそこで線画の仕事をしていたのだが、1947年にニュース映画『民主東北』内の風刺動画をマリオネットで制作するように依頼を受ける。しかし人形を上手く動かせなかったためにアニメーションで表現することにした。それはアニメーションに携わってきた持永らしい判断だと考えられるが、この時にどこまで持永が“人形アニメーション”を理解していたのかは定かではない。しかしながら偶然のように生まれたそれが中国最初の人形アニメーションとなった。さらに同年、俳優で監督の陳波児からの依頼で映画『皇帝夢』の人形アニメーションを担当して、人形アニメーションの技術精度を高めていく。その後、内戦終結と中華人民共和国の建国があり、共産党の指示で上海に移った持永は上海電影製片廠「美術組」(現在の上海美術映画製作所、中国名は上海美術電影製片廠)設立に携わるのだが、そこでは人形ではなく手描きのアニメーション制作を指導している。敗戦から8年間、このような経過を辿った持永は1953年に中国のアニメーションの未来を中国人の手に託して帰国の途についた。

そしてそれを劇作家の飯沢匡が知ることになる。飯沢は人形芸術プロダクション(以降はNGP)という創作グループを主宰していた。そのグループは飯沢に加えてデザイナーで画家の土方重巳、人形制作者の川本喜八郎、カメラマンの隅田雄二郎の4人で構成されていた。当時の彼らは人形とセットを撮影した写真を使って童話を伝える『トッパンのストーリーブック』で高

い評価を得ていたが、東欧のチェコで作られる人形アニメーションに興味のあった飯沢と、飯沢に触発された川本がその技法に強い関心を持っていた。そのため持永はNGPに招聘されて人形アニメーションの指導を求められることとなる。

1953年の冬、NGPのメンバーと持永は、飯沢と繋がり深かったアサヒビール株式会社のコマーシャル『ほろにが君の魔術師』を制作した。これが日本で最初に作られた、人形アニメーションを用いた企業PR映画とされる。さらに続けて『ほろにが君テレビの巻』（または『ほろにが君とミツコさん』）という第二弾が制作された。ミツコさん(またはミツヤ嬢)というのは土方がデザインした三ツ矢サイダーのキャラクターである。これらのアニメーターは持永であり、後年、人形美術家・人形アニメーション作家として大成する川本はまだ若き助手であった。現在、川本の設立した有限会社川本プロダクションに残されている絵コンテやスチルを見る限り、実際の役者の動きを撮影したものを下敷きとして、全身を使った豊かな動きのアニメーションだったようだ。そしてこのNGPのメンバー4名にトッパンの元編集者の森邦資が加わり、1958年3月に株式会社シバ・プロダクションが設立される。よって、1954年にミツワ石鯨の三人娘のコマーシャルが放送されたとしても、それはシバ・プロ制作ではなくNGP制作ということになる。

ところで、テレビコマーシャルの歴史の中で人形を用いたテレビコマーシャルの始まりはどのように考えられているのだろうか。それは1954年に放送された森永製菓『思い出のチョコレート』だ⁽⁴⁾。『一枚のチョコレートから』だと書かれているものもあるが⁽⁵⁾、それは三木鶏郎が書いた歌詞が“一枚のチョコレートから”始まるためだろう。これは現実部分が人形、回想部分が手描きというスタイルのコマーシャルで、人形アニメーションといってもわずかに首や腕がゆっくりと動く程度であり、全身の動作はない簡素な人形アニメーションコマーシャルである⁽⁶⁾。

一方で、飯沢は1954年2月号に発行されたアサヒビールの広報誌『ほろにが通信』の中で、『ほろにが君の魔術師』について「目下のところNTV（日本テレビ放送網）の「何でもやりまSHOW」（毎週土曜夜）と、毎日世界ニュースの一部に挿入されておりま

す。」と述べている⁽⁷⁾。また、飯沢は他誌にも「最近アサヒビールのテレビジョン・コマーシャルの為に二分半の短編を作ってみたが、二分半の間に相當のことができて、一つや二つはギャグめいたものも入れることが出来た。この雑誌が読まれるころには、毎土曜日七時半からテレビで僕たちの作った人形は魔術をやったりバレーを踊ったりしている筈である〜」⁽⁸⁾と書いている。『CMグラフィティ：テレビ25年の記録 第1集』によれば、『思い出のチョコレート』が放送されたのは1954年6月だという⁽⁹⁾。これを踏まえて考えると、『ほろにが君の魔術師』は日本初の人形を用いた企業PR映画だけでなく、日本初の人形を用いたテレビコマーシャルと考えられる可能性もあるのではないか。

5.数々のミツワ石鯨コマーシャル

さて、ここまで記した人形アニメーションが日本で制作されていく歴史の流れから、『ワが三つ』の曲がかかる三人娘の人形アニメーションコマーシャルがはたして1954年に制作出来たのかを検証していく。『ほろにが君の魔術師』が1954年初頭に制作されたこと、そしてテレビコマーシャル史における人形アニメーションの始まりが同年6月の『思い出のチョコレート』であるとするならば、三人娘のテレビコマーシャルは1954年の6月以降に放送されたことになる。興味深い記述が『学校で教えない広告論：最前線の人間だけが知っている知恵』⁽¹⁰⁾や『消費社会の広告と音楽』⁽¹¹⁾の中に書かれている。それはテレビコマーシャルソングとして『ワが三つ』が1954年12月に登場したというものだ。それが正しい場合、三人娘のコマーシャルは1954年末から放送されたことになる。

だが、三人娘の人形デザインをした土方がミツワ石鯨のコマーシャルについて言及するのは、1956年に『ミツワ・ペンキ騒動』という名のコマーシャルが最初だ。その内容とスチルは1964年の『宣伝会議』に載っているが、ペンキを被ってしまった少女が身体の汚れを石鯨で落とすという人形アニメーションだ。そこに写る人形のデザインは三人娘のようなものではなく、当時NGPの仕事の主流であった『トッパンの人形絵本』に登場する様々な童話のキャラクターに近似している⁽¹²⁾。加えて、NGPは1957年から58年にかけて切り紙(切り絵)を用いた『ミツワテレビ童話』というシ

リーズのコマーシャルを制作している。これは鉛板に貼り付けた切り絵を動かすアニメーションだった。そして使用された楽曲は小森昭宏の作曲で『ワが三つ』ではない⁽¹³⁾。

一方で、コマーシャル制作の大手だったTCJが1953年に『コトリちゃんとおフロ』という手描きのアニメーションを制作している。その『コトリちゃんとおフロ』は1956年にアメリカのCBSで日本のコマーシャルを紹介する番組でも紹介された⁽¹⁴⁾。もしも1954年以降ミツワ石鹼の主たるコマーシャルが三人娘の人形アニメーションであり、世間的な話題に上るほどのものだったとしたら、たとえ秀作であってもそれよりも以前に放送された『コトリちゃんとおフロ』が代表に選出されているのは不可解である。ちなみにこのコマーシャルではアヒルの鳴き声のように「ダッダッダ」と歌われる『ワが三つ』が使われている。

コマーシャル年表ではミツワ石鹼のコマーシャルはどのように扱われているだろうか。『CM25年史』内の年表で1953年から三人娘が登場するまでを羅列すると7作品書かれている。

1953年／コトリちゃんとおふろ

1954年／ペンキやと女の子 ＊ラジオコマーシャルの項目に「ワが三つ」

1956年／ヌードのシルエット、超泡力の実験 1957年／白雪姫、ミツワ姉妹、バラとヌード

1960年／湯上がり三人娘

一つずつ検証すると、『コトリちゃんとおフロ』は先出の通り。『ペンキやと女の子』は土方が記憶している『ミツワ・ペンキ騒動』と同じものなのかははっきりしない。タイトル、中身からすると同様のものに見えるが制作年が2年ずれている。飯沢は1954年のうちに3本のコマーシャルを制作したと記しているので、『ほろにが君の魔術師』『ほろにが君テレビの巻』ともう一つがそれである可能性は残る。そうであれば確実に1954年に三人娘は作られていないことになるのだが、『ほろにが君の魔術師』は2パターンあり、『ほろにが君テレビの巻』と合わせれば3本とも言えるので、制作された作品の内訳ははっきりしない。

むしろここで一番に気になるのは、1954年の項目で三人娘に言及されていないところだ。代わりに『ワが三つ』はラジオコマーシャルとして表記されている。

1956年の『超泡力の実験』はライブコマーシャルだが、『ヌードのシルエット』や1957年の『ミツワ姉妹』『バラとヌード』は実写なのかアニメーションなのかも判別出来ない。『白雪姫』はNGP制作の『ミツワテレビ童話』の1本である。そしてやっと1960年に『湯上がり三人娘』として三人娘が登場する。このコマーシャルは翌年1961年の『年鑑広告美術』にスチルが掲載されている⁽¹⁵⁾。また、これは川本が遺したシバ・プロ時代のコマーシャルの絵コンテに近似したものがある。

ところで、この年表では1955年、57年、59年が空白となっている。そのうち1958年の『年鑑広告美術』を読むと「～アサヒビールも低調、森永・味の素・資生堂・ミツワもヒットがなかった」と評されている（評しているのは丸見屋宣伝課長の今泉武治）⁽¹⁶⁾。そして1959年に丸見屋は久里洋二（クリヨウジ）にミツワ石鹼のコマーシャルを依頼していて、1960年のADCテレビ・コマーシャル部門で銅賞を受賞している⁽¹⁷⁾。さらに、ここには記載がないが、1956年にはTCJが制作した『ミツワのことりちゃん がくげいかい』、1957年には母娘が買い物に行くコマーシャルもあることから⁽¹⁸⁾複数種類のコマーシャルが1年の間に作られていたことがわかるが、1954年の登場から話題になったといわれる三人娘が業界で評価されるのに1960年まで待たないといけないのは疑問である。

では1954年にアニメーションではなくパッケージや広報物として人形が使われた可能性はないか。これに関してもシバ・プロの社長を務めた森邦資が「例えば、ミツワ石鹼のキャラクター。あれはかなり反響がありました。BGあたりから、あの人形をなんとかして手に入れたいというような電話がくるそうです。そこで昨年そのキャラクターを使ったパッケージを作った。」⁽¹⁹⁾と話している。これは1963年のことなので1962年にキャラクター・パッケージを作ったということになる。基本的にミツワ石鹼の広告物はテレビコマーシャルとは全く関係しておらず、それまで女性を描いたイラストは登場するものの、三人娘のキャラクターは登場しない。

6.1954年以外の記述

広告やコマーシャルに関する文献で1954年以外に三人

娘が誕生したと書かれたものはあるか。例えば、公益財団法人吉田秀雄記念事業財団が運営するアドミュージアム東京で上映されている三人娘のCMは放送年が1957年になっている。しかしモニターで流されていたCMは1960年代のCMである。また、『「昭和の人」解体新書：世代間ギャップとニュートレンドを探る。』⁽²⁰⁾には「テレビが登場してまもなくの昭和三十二年から登場してきた「ワ、ワ、ワ、ワが三つ...」というミツワ石鯨のCMは、この世代が小学校に行ったとき、クラスで知らなかったりすると仲間はずれにされたものだ。」とあり、三人娘の画像がつけられている。こちらも1957年だ。さらに『広告キャラクター大博物館』では昭和36年秋（1961）に登場したキャラクターとある⁽²¹⁾。しかし先出の通り、1960年に放送されたテレビCMが1961年の『年鑑広告美術』に掲載されているのでこれは誤りだ。

7. ラジオCMなのか、テレビCMなのか

これまで『ワが三つ』のCMソングは人形アニメーションを用いたテレビCMと紐づくものとして検証を行ってきた。しかし三木鶏郎は最初からテレビのための曲として制作したのだろうか。例えば1955年にラジオ放送が始まった『のんき裁判』（ラジオ東京）のSPONSERを丸見屋が行っていて、そこで流されたCMに『ワが三つ』が使われている⁽²²⁾。1957年1月号の『音楽の友』には「民間放送を聞いていると、珍無類、奇々怪々な歌が飛び出してきて、思わず吹き出すことが少なくない。CMソングというヤツである。」として『ワが三つ』に言及している⁽²³⁾。ここでの民間放送とはラジオである。『東京広告協会30年史』の年表の1954年の項には、テレビ放送されたCMとして「パールちゃん」資生堂・アニメCM、「思い出のチョコレート」森永製菓・アニメCMというように書かれているが、ミツワ石鯨は「ワワワー、ワが三つ」ミツワ・CMソングというように表記が異なっている⁽²⁴⁾。これらのことから、『ワが三つ』は最初にラジオCMとしての使用があり、その後、シバ・プロが設立されてから三人娘のテレビCMが登場したとは考

えられないだろうか。

森永製菓『思い出のチョコレート』もテレビCMで使用される以前にラジオCMで放送されている。テレビ放送開始直後はテレビを受信出来る家庭がかなり限定的であったため、まずはラジオ優先という時代だったのではないか。

ただし、『ワが三つ』のCMソング自体がテレビから聞こえてこなかったのかというと、そうではないようだ。「テレビのスイッチを入れたら、ワ、ワ、ワ、輪が三つ...という唄が聞こえてきた。テレビは、音が聞こえて画面があらわれるまで、三、四秒かかる。何が出るかと期待していたら、ある化粧品の広告で、これはその主題歌であった」という文章が1956年に書かれている⁽²⁵⁾。

また、『ワが三つ』を『名犬ラッシー』の中で見たという証言も聞かれる。『名犬ラッシー』は1957年からラジオ東京（現：TBS）で放送されていた。そして1959年の『広告文案の技術』には「サンスター歯磨のペンギンの歌や、ナショナル電器、武田製菓のパンピタン、ミツワ石鯨など、ラジオばかりではなくテレビにも使われて成功している。」とある⁽²⁶⁾。それでもこれらはミツワ石鯨のテレビCMが放送されていたことを示すだけで、そこに三人娘が登場したという確たる証拠にはならない上、1954年より後のテレビ放送の話になる。

加えて、現在見ることの出来るCM映像から想像すると「ワが三つ」は女性が歌う楽曲のように考えてしまうが、1954年のCMはダークダックスによる男性歌唱だったという記載がある⁽²⁷⁾。テレビCMで耳にする女性歌唱のスリーパプルスやスリーグレイセスがデビューするのは1959年になるため、1954年には歌えない。

8. 当事者の言葉

三人娘をデザインした土方重巳から考える。三人娘のデザインは時代が進むにつれて顔や目が丸く可愛らしさが増していくが、髪先の外側にはねる髪型は変わらない。ではそれは1954年頃に一般的な髪型だったのだろうか。1954年は日本で『ローマの休日』が大ヒットし、『麗しのサブリナ』も好評で、ショートヘアのオードリー・ヘップバーンが人気を博した年でも

ある。そしてこの年、土方は文学座の『二号』という演劇のパンフレットのデザインをしている。そのパンフレットには出演者の集合写真が載っているが、パーマヘアが主流である。ショートヘアやパーマヘアが流行していた時代にデザインしたとすれば一体何を参考にしたのだろうか。それは突然オーパーツのようなデザインが浮かんだことになりはしないだろうか。

土方は三人娘以外に数多くのキャラクターデザインをしているが、1961年に自身のデザインスタイルについて「ボサストーという人の作った“マグーもの”の一連の映画ですね、ディズニーでは『プカドン交響楽』というのがありましたが、リミテッドアニメーション、すなわち誇張された動きです。人形は頭でつかちで、極端に単純化されます」と話している⁽²⁸⁾。その言葉の通り、土方がデザインしたアサヒビールのコマーシャルに登場する西部劇スタイルのデカ・チビといったキャラクター造形はまさしく『プカドン交響楽』（監督：チャールズ・A・ニコルズ、ウォード・キンボール 製作：ウォルト・ディズニー、ロイ・ディズニー）や『近眼のマグー』を製作したUPAの影響が色濃く出ている上、アサヒビールのコマーシャルに登場する女性のキャラクター造形は大きなアーモンド型の目など三人娘にも共通する要素がある。ちなみに『近眼のマグー海底旅行』は1957年、『近眼のマグー千夜一夜物語』は1960年に公開されていて1954年には見られない。

飯沢匡は1955年に『プカドン交響楽』を視聴している。それについて「ディズニイのシネスコ用漫画『プカドン交響楽』をみたが、画風もさること乍ら、アニメーションを故意に、ぎこちないものにしてのことに感心した。ライブ・アクションに頼りすぎて、写真の実物写真と変わらぬ動きをする漫画映画には、倦きて来た我々には、人形映画の素朴な円滑を欠いた動きは新鮮な魅力になりつつある。」（原文ママ）と興味を示した⁽²⁹⁾。NGPから設立初期のシバ・プロダクションは飯沢のリードで進んでいたと考えられるため、土方のデザインの変化には飯沢の影響もあったと言えないだろうか。シバ・プロ以前の土方のデザイン（挿絵）はもっと写実的なスタイルであり、シバ・プロ以前の代表作の一つである「ヤンボウ・ニンボウ・トンボウ」や「ブーフーウー」も決してアメリカのアニ

メーションの影響が濃いとは言えない。「昭和三十三年、私達は人形アニメーションによるCM製作会社を設立した。～中略～CMの仕事は全く過酷な仕事だった。毎月十〇本以上のアイディアを考え、人形の製作、演出、アニメーション、編集まで受け持ったのである。人形のスタイルは当時のアメリカのCMアニメの影響が大きかった。「ミツワ石鹸」「アサヒビール」などもその影響が残っている。」⁽³⁰⁾これは川本によるシバ・プロ時代を述懐した言葉だが、土方のデザインについても触れられているものだ。

これに合わせて人形造形の観点から検討を行う。三人娘の人形はつるりとした顔に紙製の目と口を貼っている。この方法は1954年当時『ほろにが君』や人形絵本を盛んに作り出していた頃には行っていない。そして、『グラフィックデザイナー 土方重巳の世界』に掲載されている制作中の写真を見ると三人娘はラテックスを貼り合わせて造形されている。それもまた1954年当時川本喜八郎が行っていた布製の人形の制作方式と合致しない。付け加えると、同書の同じ頁に1950年代とされる土方による三人娘の一人のデザイン画が掲載されている⁽³¹⁾が、川本が遺した昭和35年(1960年)のシバ・プロの絵コンテにそのデザインを使用したコマーシャルの絵コンテが描かれていることから、その記載年代は検証の余地がある。

さて、日本アニメーション協会歴史部会が発行した『ANIMAIL』第2号に貴重な証言が掲載されている。その中で『持永只仁の足跡』を記した小松沢甫は、ミツワ石鹸のコマーシャルにも持永が携わっていると思っていたが、川本からの私信で持永の関わりを否定されたという。川本は1956年から58年までNGPと並行して、持永が設立した人形映画製作所で、持永只仁監督作の人形制作を行い、アニメートを学んだ。1956年にNGPと持永が協力して制作した『ビールむかしむかし』でも、川本はアニメーター助手を務めた。そのような状況で持永が三人娘に関わっていないとすれば、1954年に満足なアニメートは困難を極める。そして制作年次についても小松沢は川本に「ミツワ石鹸CMの初めての作品は1954年というのは誤りで多分1958年だと思います」と指摘されたと記している。また小松沢はその項で『CM特集号Ⅱ』（1960年4月号）に掲載された三木鶏郎に関する文章を記しているが「～『ワが

三つ』が1954年初出は事実らしい。ただしこの文章ではTVCMとは断定していない。三木はそれ以前からラヂオCMを手掛けられていたので、この年代記入はラヂオCMの可能性が高いのです。」として、ここまで述べてきたことと同様の結論に達している⁽³²⁾。そして川本と同様に、土方もミツワ石鹸の三人娘のデザインに関して『土方重巳 造形の世界』で昭和33年から41年の仕事の中に記述している⁽³³⁾。このように、コマーシャル史と異なり三人娘のデザインをした土方も人形を制作した川本も三人娘のコマーシャルの仕事を1954年よりも後のものとしている。ただし、川本はミツワ石鹸の三人娘を1958年としているが、これまで調べてきた通り、三人娘のコマーシャルスチルや絵コンテの存在が把握出来るのは1960年からである。

2010年に亡くなった川本は、生前自身がアニメートをしたミツワ石鹸のコマーシャル映像を探していたが発見出来なかった。川本は1963年にシバ・プロを退職しており、テレビ番組やインターネットで見ることが出来るミツワ石鹸のコマーシャルは自分自身が関わったものではないと、筆者自身が直接川本本人から聞いている。実際、SNSに度々登場して川本喜八郎作として紹介されるコマーシャルは、1964年ACC第4回CMフェスティバルで銅賞を受賞したミツワプラスのテレビコマーシャルで、監督を大熊隆文、アニメーターを小林孝司が務めており、同時期にチェコ・スロバキア留学をしていた川本は関わりがない。1960年よりも前の三人娘のスチルや絵コンテが見つからず、持永只仁に学び、シバ・プロ設立時のメインアニメーターであった川本が関わった三人娘のコマーシャル映像も見つからず、三人娘を用いた1954年のテレビコマーシャルがどのようなコマーシャルだったのかという具体的な記述も見つけられないのが、調べてわかったことである。

9.なぜ1954年に3人娘のコマーシャルが放送されることが気になるのか

1954年11月に日本初の怪獣映画『ゴジラ』が公開された。そこに登場するゴジラは着ぐるみで、中島春雄によって演じられた。だが特技監督の円谷英二は戦前に見た『キング・コング』に憧れ、『ゴジラ』を人形アニメーションで撮影したいという希望を持っていた。ところが撮影期間に制約があり、着ぐるみ方式を

採用したとされる。それでも『ゴジラ』には数箇所だけコマ撮りを使用したカットが存在する。だがそれは日本劇場を崩すゴジラの尻尾や瓦礫に乗り上げて横転する消防車の動きのように怪獣が複雑に動き回る場面ではない。

『ゴジラ』は、持永が帰国してNGPに招聘されて『ほろにが君の魔術師』を作り、人形アニメーションが国内で産声をあげてから1年も待たずに撮影が開始されている。作品自体の製作の検討は1954年5月頃であるから⁽³⁴⁾森永製菓『思い出のチョコレート』もまだテレビで放送されていないことになる。円谷はコマ撮りが使われたとされる1935年公開の映画『かぐや姫』に参加しているが、そこで使われた手法は異なるポーズの人形を置き換えて撮影するものであり、関節の入った人形を動かす方式ではない。

1954年当時の日本ではプロの人形アニメーターと満足に名乗れる人物が持永しかいない。

その時点で『ゴジラ』を人形アニメーションで制作することは、制作期間の制約以前に技術の伝播の観点から見ても不可能だ。ところが制作期間の長さのみが着ぐるみになった理由として定着している。それは人形アニメーションが古典的な特撮技術としても知られ、映画の黎明期から広く使われているものと考えられているため、日本では1953年になってようやく本格的な人形アニメーション制作が始まったという人形アニメーションの歴史が浸透していないからではないだろうか。

実写の人物と人形アニメーションが組み合わされる特撮映画の観点で言えば、1920年代に日本で『ロスト・ワールド』や『キング・コング』が劇場公開されているものの、技術面においては人形アニメーションよりスクリーンプロセスに対する関心が強い。『猿人ジョー・ヤング』が1952年に公開されていても、『ゴジラ』までにその影響で日本でも人形アニメーションを用いた特撮映画が作られたという話はない。つまりアメリカ映画と同じ特撮技術の流れを日本に当てはめることは出来ない。もちろん戦前から人形アニメーションの作り方は知られていて、個人で人形アニメーションを制作した人物はいる。しかし1954年当時の人形アニメーションは、存在を知られていても大々的に商業利用されない技術だったと言える。

ところで人形アニメーションで知られるチェコの商品も、現在は簡単に作品を見ることが出来るが1954年はまだ海外映画の輸入に制限があり、一般的にほとんど見ることが出来ない状態だった。税関の試写室での視聴や雑誌に載ったスチルから内容を想像することくらいしか出来ず、気軽に劇場やテレビでチェコの人形アニメーションを見られるようになるのは1956年以降になる。こちらも日本で古くから知られているように思われるが、実際はそうではない。

土方のデザインした三人娘は、現在にも通じる可愛らしさのため頻繁にSNSで話題に上る。だが、その際に1954年にミツワ石鹸の人形アニメーションのCMが放送されていたという認識がより定着していくと、1954年時点の日本でも人形アニメーションは広く使われている技術だったという事実誤認がさらに補強されてしまいかねない。また、Wikipediaのミツワ石鹸の項目でも「1954年（昭和29年）テレビCMを放送開始。バトンガールと呼ばれる3体の人形を使用し～」とある。1954年に三人娘が登場という書籍の記載が数多にあるためだと考えられるが、近年はWikipediaの記載内容が鵜呑みにされる傾向にあるので、きちんとした検証が求められる。

10.まとめ

ここまでCM史とアニメーション史の間にある矛盾を検証してきたが、現時点で三人娘の人形を用いたミツワ石鹸のテレビCMがいつから放送されたのかははっきりしない。しかし数々の情報の積み上げから、CMの歴史で語られている1954年に三人娘の人形が登場したという証拠はないと言える。ただし、CM制作当事者の川本が語った1958年からという証言の確実性もない。

三人娘が1954年から話題になったという記述は1970年代以降の書籍に集中していて、1950年代当時の広告関係の書籍には『ワが三つ』のCMソングへの言及はあっても三人娘に関する記述は見つからない。1970年代に出版された書籍で三人娘について記している執筆者も1954年当時はまだ10代の年齢だった場合が多い。つまり執筆者の記憶に曖昧さはないだろうか。1954年はテレビ放送が始まって2年目である。『東京総合年鑑 昭和30年版』では年末時点のテレビ受

信台数は三万九千三百台。1955年の『新聞論調』でも四万四千台となっている⁽³⁵⁾⁽³⁶⁾。執筆者が当時テレビを自宅等で日常的に見られる状態だったのかも気になるところだ。

1954年に『ワが三つ』のCMソングが誕生したため、それならば3人娘も同じタイミングで登場したと勘違いした可能性はないだろうか。しかし、例えば資料の存在が確認出来る1960年を三人娘の登場年だとするならば6年間も登場時期にずれが生じる。はたしてこのようなことがあるのだろうか。

人形アニメーションはテレビCMで用いられることによって技術的に発展し、アニメーターの育成が成されるとともに多くの作品が制作された。そのため人形アニメーションとCMの歴史を分けて考えることは出来ない。しかしながらそれぞれ全く別々の観点で研究されていて歴史の共有がなされていないことから、このような食い違いが起きていると考えられる。今後も調査を続けていくことでより情報の精度を高めていく考えではあるが、これはわずか70年ほど昔の出来事にもかかわらず、持永只仁も川本喜八郎も土方重巳も飯沢匡も鬼籍に入ってしまった現在、その当時を探るのは容易ではない。CMを中心に発展した最初期の人形アニメーションは、芸術として評価研究される前に消費の波の中に埋もれてしまった。

長野県飯田市川本喜八郎人形美術館に、2008年に川本が製作した3人娘の人形が展示されているが、テレビCMを彩った、当時の人形が現存するのかわかっている。

註

- (1) 三木鶏郎「冗談十年 中巻」1954年,P.113
- (2) 全日本CM協議会編「CM25年史」1978年,P.126 P.360（年表）
* 「CM特集号II 1960年4月号」からの転載と思われる。
- (3) 川本喜八郎によるミツワ石鹸復刻CM絵コンテ案に記載
- (4) 向井敏「紋章だけの王国」、1977年 P.201
- (5) 岡田芳郎「アド・スタディーズ／テレビ・CMの60年」、2012年 P.12
https://www.yhmf.jp/as/.assets/ads_41.pdf
- (6) 20世紀のCMデータベースより
広告主：森永製菓株式会社／代理店：電通／製作会社：株式会社
テイ・シー・ジェー（TCJ）

<https://www.arc.ritsumei.ac.jp/lib/vm/cmdb/>

- (7) 「ほろにか通信」、1954年 P.6
- (8) 飯沢匡「映画の友／嘘」、1954年 P.91
- (9) 山川浩二「CMグラフィティ：テレビ25年の記録 第1集」、1980年 P.21
- (10) 中井幸一「学校で教えない広告論：最前線の人間だけが知っている知恵」、1980年 P.30（年表）、P.65
- (11) 林進（ほか）「消費社会の広告と音楽：イメージ志向の感性文化」、1984 P.16
- (12) 「宣伝会議」、1964年 P.49
- (13) 「アイデア」、1958年6月号 P.61
- (14) 「読売新聞」、昭和31年1月23日夕刊
- (15) 東京アートディレクターズクラブ編「年鑑広告美術1961」、1961年 P.272
- (16) 東京アートディレクターズクラブ編「年鑑広告美術1959」、1959年 P.234
- (17) 東京アートディレクターズクラブ編「年鑑広告美術1960」、1960年 P.274
- (18) 立石悦子「宣伝会議」、1957年12月号 P.38
- (19) 全日本CM協議会「CM研究 No.16」、1963年 P.28
- (20) マンダラハウス、室橋竜一編「昭和人 解体新書：世代間ギャップとニュートレンドを探る。」、1986年 P.135
- (21) ポッププロジェクト編「広告キャラクター大博物館」、1994年 P.170
- (22) 万年社編「広告年鑑1956年」、1956年 P.152
- (23) 「音楽の友」、1957年
- (24) 東京広告協会30年史編集委員会編「東京広告協会30年史：1947～1978」、1978年 P.98
- (25) 宇井無愁「下着を脱いだお嬢さん：風流随筆」、1956年 P.108
- (26) 宝田庫造「広告文案の技術」、1959 P.151
- (27) 中井幸一「学校で教えない広告論：最前線の人間だけが知っている知恵」、1980年 P.65
- (28) 仙名紀「朝日ジャーナル／CMの人形屋」、1961 P.62
- (29) 飯沢匡「映画芸術」、1955年 P.34
- (30) 日本人形玩具学会史編集委員会編「かたち・あそび日本人形玩具学会会誌7」、1996年 P.97
- (31) 「グラフィックデザイナー 土方重巳の世界」、2018年 P.209
- (32) 小松沢甫「ANIMAIL歴史部会版第2号『持永只仁の足跡』」、2000年 P.78
- (33) 土方重巳「土方重巳 造形の世界」、1978年 P.63
- (34) 「ゴジラ研究極本」、2023年 P.220
- (35) 東京都政研究会「東京総合年鑑 昭和30年版」、1955年 P.360
- (36) 内閣総理大臣官房調査室「新聞論調」、1955年 P.57

協力：有限会社川本プロダクション